

○武田重昭*

1. はじめに 春の風景—2020年

2020年の春、未知のウイルスが世界中を不安の渦中に陥れた。日本でも4月7日に7都府県を対象に緊急事態宣言が行われ、4月16日には対象が全国に拡大された。春は変化の季節である。温帯に属し、気温や降水量の年変化が大きい日本は、四季による自然の移ろいが際立って美しく、そのリズムにあわせて歴史的・文化的な暮らしが営まれてきた。特に春は年度の変わり目でもあり、様々なあたらしい生命の息吹を感じられる季節である。それだけに、自粛生活を強いられた私たちの心へのダメージは、とても大きいものであった。日々の暮らしは一変し、特に都市では人々の交流というその本質的な魅力が損なわれた。これによって、人々の活動をその重要な構成要素とする都市の風景はいつもとは大きく違うものになった。

2. 光景と情景 風景の空間的価値と時間的価値

自宅で過ごす生活が長引くほど、人びとは身近な屋外空間に悦びを求めようになる。大人数での集合を避けながらも散歩や運動をはじめ、食事を楽しんだり、パソコンに向かったり、なかには青空のもとで麻雀を楽しむ人たちがまですが都市のあたらしい風景となった。これらは抑鬱された生活のなかでの抑えきれない欲求を満たそうとする行動だが、世情のことを少し脇に置いて、目の前の風景だけを切り取ってみると、身近な空間がずいぶんうまく使いこなされていると見ることもできる。そこにはこれまでのような人びとが集い、交流する集団の歓喜のような都市風景はないが、それでも、思い思いに過ごす人たちが互いの距離を保ちつつ離散的に集合¹⁾する風景に、風景の価値を見出すことはできそうだ。離散とは疎外ではなく、むしろ離れたもの間の意味を生みだす。身体的な関わりを持つことなく、しかし同じ時間と空間を共有することによって他者と連帯するという、あたらしいパブリックライフの風景が生まれている。

ビフォー・コロナの社会において、私たちが都市の風景に惹きつけられるのは、そこには多くの人々が集まることによる「にぎわい」が大きな要因となっていた。例えば大阪では、水都再生へのプロセスにおいて、一定のハード整備を先行させた後で、リニューアルされた中之島公園を中心



写真1 2020年5月の大阪・中之島公園の風景

*大阪府立大学大学院生命環境科学研究科

に展開された「水都大阪2009」のイベントが象徴的であった。多くの市民が水辺に集い、様々なプログラムに歓喜し、都市への誇りを鼓舞しあつた²⁾。このような光景が市民の手によって大阪の水辺に展開されたことは、大阪のまちが最も美しく輝いた瞬間であり、それはまさに、あたらしい水の都大阪を象徴するスペクタクルだった。都市には一期一会のドラマチックな場面や祭りやイベントといった集団で祝福を共有する風景が不可欠である。

このような光景は風景の持つ空間的価値を瞬時に顕在化させるものである。一方でそれは、日常的にいつも現れているものではない。むしろ非日常であるからこそ、その刹那の価値がより一層高まるのである。コロナ禍で現れたあたらしい生活の風景にも、このような光景の価値を見ることができる。しかし、それは一瞬の魅力として失われていくのか、あたらしい文化として根付いていくのかによって、都市風景の持つもう一方の価値である時間的価値が決まる。都市風景はそれを支える自然基盤、その上に築かれた土木・建築構造物、さらにはそこに生きる人々の姿そのものが重要な構成要素となって、その総体をかたちづけている。都市の風景は一朝一夕につくられるものではなく、長い年月をかけてそこに築かれてきた環境の一断面である。都市風景はあるひとつの状態に留まることはなく、人々の働きかけによって絶えずその姿を変え続けている。そこには人々と環境との相互作用からなる生きたシステムとしての生態系が成立している。これこそが都市が生き物であると言われる所以であり、都市への総合的なアプローチが求められる理由である。風景はその特徴を最もよく反映させている。それゆえに、風景の価値は私たち一人ひとりの生活行動によって大きく左右される。日常の営みの風景にこそ、時間的な価値が宿っているのだ。

鳴海は「単なる空間の実態だけではなく、空間のなかで生きている生活の仕組みが透けて見えている」³⁾ 状況を情景と呼んでいる。情景には表層的な形態の美しさだけでは

なく、そこにある暮らしの魅力があらわれている。その背景にはその暮らしが持っている時間の流れが透けている。新型コロナウイルスは世界中に大きな困難や苦痛をもたらしている一方で、あたらしい風景の価値もつくりだしている。この苦境を乗り越えた先に再び取り戻される日常が、いままでと何も変わらない、もしくはいままでよりもつまらない社会になるのでは惜しい。この状況下に生まれつつある身近な暮らしの変化を集めて、その可能性を広げ、望ましい方向に導くことができれば、この災禍をこれからの都市を考えるうえでの大きな転換点とすることができるはずである。それはまだわずかな変化かもしれないが、時間をかけて積み重なっていくことで、都市の風景はあたらしい顔を見せてくれる。いま、都市の風景を考えることに希望が持てるとすれば、それはすぐに答えの出ない都市風景の価値を生み出す可能性にはないだろうか。

3. コロナ禍における公園の捉えられ方

新型コロナウイルスの流行により、これまでとは異なる生活様式が求められる中で、都市のオープンスペースのなかでも公園には感染を予防しながら利用を促進するといった複雑なニーズへの対応が求められている。

全国紙の一つである朝日新聞を対象に、2020年1月から11月の記事のうち「公園」と「コロナ」の両方を含むものを抽出し、公園が社会的にどのように捉えられていたのかを見た。全国の感染者数が増えはじめた3月下旬から5月上旬の第1波と呼ばれるは時期には、特に報道数も多くなり、公園の閉鎖などが相次いだことに対する悲しみや恐れといったネガティブな感情が目立ったが、一方で密を避けながら社会的に過ごせることに対する安心や喜びといったポジティブな感情もみられ、公園そのものの必要性や公園をもっと利用してほしいといった意見もみられた。

公園に対する感情や意見は、感染者数の増減やそれに対する社会的な対応の変化にあわせて刻々と変化している。当初は迷惑施設としてのネガティブな感情も多かったが、都市における唯一無二の自由空地としての意義をより切

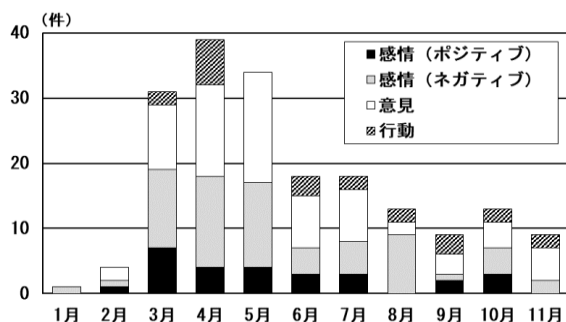


図1 新聞記事の内容の変化



写真2 2021年4月の大阪・靱公園の風景

実に感じるような世論も確認でき、あたらしい生活様式に対応した都市空間の利用の作法や工夫がさらに展開されることが期待できる。

4. おわりに 再び春の風景—2021年

そしてまた季節は巡って春。今年の春もこれまでとは違う別れ方と出会い方を体験したが、それでも私たちはこの1年を通じて、あたらしい春を悦ぶ知恵を身に付けてきた。今年の春の公園の風景にはどこか、時間の蓄積を経た他者と過ごす共感の価値が内在されているように感じられる。

平野は恋愛という言葉に「恋」と「愛」に分けて考え、「恋」とは、まだ結ばれていない二人が結ばれることを願う、利他的な激しい感情である。それに対して、「愛」とは、既に結ばれた関係を長く継続させる感情である。」とし、「恋」と「愛」とは、言い換えるならば、「好きになること」と「好きであること」である。」⁴⁾と述べている。私たちは希望の光景によって都市に恋をし、意志ある情景によって都市を愛する。どちらの感情も都市に欠くことのできない風景のかけがえのない価値である。風景は都市を好きになるきっかけを与え、都市を好きであり続けることを可能にさせてくれる。

いつか戻ってくる日常で、私たちはやはり過去の慣性に捕われ、目の前のことに意識を集中しすぎてしまうだろう。そのとき目の前にある風景に、いまここにしかない価値と、いまここだけではない価値を見出していくための準備が必要だ。

補注及び引用文献

- 1) 原広司「集落の教え100」1998年:彰国社
- 2) 橋爪伸也「水都 大阪物語—再生への歴史文化的考察」2011年:藤原書店
- 3) 鳴海邦碩「情景の都市」1991年:建築雑誌 (1313)18-19:日本建築学会
- 4) 平野啓一郎「あなたという時の自分」2018年:考える葦:キノブックス